

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02939

研究課題名(和文)近代ロシア・ナショナリズムの形成 ロシア帝国西部地域諸民族との相互関係のなかで

研究課題名(英文)Formation of Russian Nationalism: Through Analyzing Interactions with Nations in the Western Borderlands of the Russian Empire

研究代表者

青島 陽子 (Aoshima, Yoko)

神戸大学・国際文化学研究科・准教授

研究者番号：20451388

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：ロシア帝国西部境界地域におけるロシア・ナショナリズムの形成プロセスを、諸民族のアイデンティティの勃興、それとの接触と衝突、相互影響などから明らかにした。特に、社会史的な分析に力を入れ、個別の具体的な事例を入念に分析することを心掛けた。研究の推移とともに、研究分担者の範囲を超えて、多様な国家の研究者がプロジェクトに参加することになり、そのことで、多角的な視点から議論を深めることができた。宗教に焦点を当てたことで、ロシア・ナショナリズムの形成も含め、前近代からの諸民族のアイデンティティの変容のプロセスを、統治システムや社会制度の変化のなかで明らかにすることができたと考える。

研究成果の概要(英文)：This study elucidated the formation process of Russian nationalism in the Western Borderland of the Russian Empire, analyzing the encounters, collisions, and interactions of the imperial government with various national groups. We used a social history methodology, and paid special attention to particular concrete case studies. As the study progressed, the study group extended the boundary of official collaborators, including leading scholars of this field in various countries. As a result, the discussion was deeper and wider than was planned at the first stage. After choosing religion and nationalism as a focal point, we succeeded in demonstrating the process of transformation in national identities, first of all Russian nationalism among them, from the pre-modern to the modern period under this specific imperial governing system.

研究分野：歴史学

キーワード：ロシア帝国 民族問題 宗教 ナショナリズム 中東欧

1. 研究開始当初の背景

ウクライナでの紛争を契機として、近年ではヨーロッパとロシアの文明論的差異が強調され、境界地域では相互排他的なナショナリズムが高揚する傾向がみられる。しかし歴史的に見れば、ロシアのナショナル・アイデンティティは、ポーランド、リトアニア、ベラルーシ、ウクライナとの相互影響関係のなかで生まれてきたものであり、それぞれ密接に連関している。

こうした問題に関して学術研究を振り返ると、近年の諸研究は、ロシア帝国が、王朝原理に基づき、民族的エリートや宗派などを通じた間接統治によって比較的緩やかに域内の多元空間をまとめ、広大な領域を統合していたことを強調してきたと言える。そのなかで、帝国全体を「ロシア化」しようとする「公定ナショナリズム」も従来言われたほど強固ではなかったことが指摘され、帝国の抑圧と諸民族の抵抗という図式も見直されてきた。

しかし、多様性を包含する帝国統治イデオロギーが強調されるあまり、逆にロシアのナショナル・アイデンティティは未発達であったとされ、その分析が進んでいない。ロシア・ナショナリズム分析は伝統的に西欧との対比で文学・思想史分野で研究されてきたが、近年のロシア帝国論の成果を踏まえつつ、隣接する諸民族との社会的相互関係のなかで具体的に分析する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ロシアのナショナル・アイデンティティの形成を、ヨーロッパ北東部に位置するロシア帝国西部地域諸民族の相互影響関係の分析を通じて明らかにすることである。

観念的な西欧とロシアの対比ではなく、ヨーロッパ北東部の諸民族との具体的な社会的関係性のなかで醸成されものとして、新しいロシア・ナショナリズム像を提示することを試みる。そのことでロシアとヨーロッパの歴史的記憶や価値観の分断線を架橋することをめざす。

そのことは、ロシア対ヨーロッパに分断されがちであった、中欧・東欧・ロシアの通史的理解を変えることにつながるであろう。さらには、当地の諸民族が衝突しつつも共存した記憶を再生し、相互の異文化理解の推進に貢献することが期待される。

3. 研究の方法

本研究方法の特徴点は、ロシア、ポーランド、リトアニア、ベラルーシ、ウクライナ史を専門とする研究者と連携し、相互に意見を交換しながら、諸民族の相互影響関係を多角的に検討するというものである。

とくに、多様な諸民族の具体的ななかかわりを見るために、社会史的な観点を重視する。なかでも重要なテーマとなったのは、教育と

宗教である。こうした社会史的な分析は、資料の読解、研究史の把握の双方において、多言語の理解力を必要とする。そうした技術的な問題のみならず、衝突の歴史がある地域では、歴史への視角それ自体が、各国の歴史学ごとに大きく異なることも多く、それぞれの国を研究対象とする歴史家が一堂に会して対話を重ねること自体に大きな意味を見出せる。こうしたことから、本研究は、多様な地域に関する多様な諸国の専門家と議論をしながら、研究を深めるという手法を重視する。

具体的には、代表者がロシア帝国の帝国統治イデオロギー、公定ナショナリズム、ロシア・ナショナリズムの研究を進め、分担者の梶さやかはポーランド・リトアニアのナショナリズムを、福嶋千穂は宗教的アイデンティティとナショナル・アイデンティティの関係を、リトアニア歴史学研究所のオルガ・マスチャニツァは海外共同研究者としてリトアニアとベラルーシのナショナル・アイデンティティを分析する、という形を当初は構想した。

研究開始とともに、リトアニア歴史学研究所のオルガ・マスチャニツァとの連携が次第に拡大し、リトアニア歴史学研究所 19 世紀研究セクション全体との共同研究へと発展していった。2016 年度には、ヴィルニユスの歴史学研究所で国際シンポジウムを開催し、2017 年度には、リトアニア歴史学研究所ダリウス・スタリューナスのチームが、本研究との共同研究として、リトアニアの学術支援基金から助成を受けた。ダリウス・スタリューナスは東欧・ロシアにかけて広く国際的に活動している指導的な研究者であり、リトアニア歴史学研究所との共同研究は本研究の進展に重要な役割を果たした。

こうした共同研究の具体的な推進の方法として、国際会議の場を設けることは非常に有効である。実際に、2015 年 8 月 ICCEES 世界大会、2016 年 8 月ヴィルニユスでのリトアニア歴史学研究所との共同開催での国際シンポジウム、2018 年 2 月の東京大学でのリトアニア歴史学研究所との共同開催での国際シンポジウムと、毎年大規模な国際会議を開き、最先端の研究者を招聘し、議論を深めた。以下、その成果を詳述する。

4. 研究成果

【2015 年度】

ロシア帝国西部地域におけるナショナリズムの多層性について社会史的な分析を進めた。まず、2015 年 8 月に ICCEES (国際中欧・東欧研究協議会) 第九回世界大会 (幕張) にてリトアニア歴史学研究所オルガ・マスチャニツァとの協力でパネルを組織した (“Tangled nation-building competition in Ziemie za-brane (eastern region of Poland) or Zapadnyi Krai (western region of Russia)”)。マスチャニツァは緊急入院のため

に来日できなかったが、論文を事前に送付してもらい、当日、彼女の論文も含めて議論を行った。ここにはプロイセン・ポーランド関係の専門家である今野元にも参加を依頼し、討論者にはロシア帝国の宗教政策の第一人者であるポール・ワースを招聘した。フロアも含め、今後の議論の展開を促す多くの意見を得ることができた。さらに、幕張での国際学会の後に神戸でワークショップ(“Empires, religions, and nationalisms in Central and Eastern Europe and Russia”)を開催した。そこでは、ポール・ワース、別の財源で招聘されたルーマニア人のコンスタンチン・ヨルダッキに中・東欧・ロシアの帝國的統治・宗教・ナショナリズムについての報告をもらった。同時に、オルガ・マスチャニツアの報告原稿を研究代表者が報告し、共同研究者の福嶋千穂、東方ユダヤ人の専門家である高尾千鶴子に討論者を務めてもらい、さらに、ロシア帝国の仏教徒の専門家である井上岳彦を招き、フロアから議論に参加してもらうことで、学術的に高い水準の議論を行うことができた。当ワークショップには、関西全域から研究者・院生を含め 30 名程度が参加した。ワークショップの準備も含め、こうした議論は、その後の発表された青島陽子「ロシア帝国の「宗派工学」にみる帝国統治のパラダイム」や福嶋千穂『プレスト合同』に一部、生かされた。さらに、2016 年度の宗教とナショナリズムとの関係を問うという問題設定を深化させることになった。

【2016 年度】

2016 年度は、上述のように、2015 年度の国際学会・ワークショップでの意見交換を踏まえながら、リトアニアの首都ヴィリニウスで、オルガ・マスチャニツアの所属機関であるリトアニア歴史学研究所で国際シンポジウムを開催した(8月22日・23日: “Entangled interactions between religions and national identities in the space of the former Polish-Lithuanian Commonwealth”)。この国際会議には、共同研究者の福嶋千穂、オルガ・マスチャニツアのほか、開催地であるリトアニアの研究者、さらにはロシア、ポーランド、アメリカ、ウクライナ、イスラエルなど 8 か国から、総勢 15 名の学者が集まった。

このシンポジウムでは、ロシア帝国の西部国境地域とその周辺の諸民族形成過程をより詳細に分析するために、前年度の議論も踏まえて、宗教というファクターに着目した。当該地域の民族形成の歴史分析では、伝統的に言語に注目が集まってきた。それに対して、近年ではロシア帝国論を中心に宗教的ファクターに着目した研究が発展してきた。そこで、ナショナリズムと宗教をテーマとしながら、前近代との連続性と断絶、ネイション構築における社会変容の実態、ナショナル・ナラティブの構築における過去の参照方法、宗

派国家たる帝国とネイションの関係性など、新しい観点から当該地域の複雑なネイション形成とそれら相互の影響関係を討論した。

当初は小規模な会合を検討していたが、想定を超える規模の国際シンポジウムとなった。その理由としては、本科研費以外に、民間の財団(三菱財団「ヨーロッパ東部諸民族の文化的・歴史的交流に関する社会史的分析」)からもご支援を頂くことができたため、セッションを増加して参加人数全体を増やすことが可能となったことが大きい。さらに、当研究プロジェクトに対して、リトアニア歴史学研究所が真摯に協力をしてくれたため、世界各国から第一線の研究者を集めて討論をする場を作ることができた。

この国際シンポジウムの機会を活用して、リトアニア歴史学研究所 19 世紀セクションのリーダーであるダリウス・スタリューナスと研究打ち合わせを密に行い、今後の共同研究の計画を話し合った。この話し合いの結果、このシンポジウムを成果に、リトアニア歴史学研究所が、本研究課題との共同研究として、リトアニアの学術支援基金から競争的資金を獲得することができた。その資金と当科研費を併せ、最終年度となる 2017 年度に、11 月にアメリカ最大のスラヴ・ユーラシア研究学会の大会への参加、さらに、2018 年 2 月には東京で新たな国際会議を企画するに至った。

また本シンポジウムの成果は現在、出版を目指して出版社との折衝を続けている。出版が実現すれば、近世から近代にかけて、東欧・ロシアの間の歴史的な関係性が具体的なレベルで一層明らかになるとともに、前近代的な社会関係を制御していると考えられてきた宗教と、近代に特有のアイデンティティと考えられてきたナショナリズムが、歴史的にどのようにリンクしながら展開するのか、という普遍的な問題の理解の深化にも貢献することになる。同時に、多民族を制御する帝国とナショナリズムの間の緊張関係、ロシア帝国そのもののナショナリゼーションなどの諸問題にも新たな光を当てることになるだろう。

本年度の研究の進展は、梶さやか『ポーランド国歌と近代史 ドンブロフスキのマズレク』、「国民教師養成の社会史—ヴォロネシ教師セミナリアの事例から」『国際文科学研究』第 47 号などに反映された。

【2017 年度】

2017 年度は、前年に採択されたリトアニア歴史学研究所の研究課題との共同開催で、20 世紀初頭の帝国とナショナリズムをテーマとした実証的な分析に着手した。前年度の国際シンポジウムの際の研究打ち合わせで、19 世紀中葉についてはかなりのことが明らかになってきたのに対して、20 世紀初頭はほとんどのことが分かっていないので、この時代に焦点を当てて研究することに意義が

あるとの意見が出され、そのテーマに沿った研究に着手することとなった。

まず皮切りとして、11月12日にアメリカのスラヴ東欧ユーラシア研究協会年次大会にて、本研究テーマに関わる先端的研究者でアメリカ在住ロシア人のミハイル・ドルビーロフ、ポール・ワースを討論者と司会者に招き、共同研究者のリトアニア歴史学研究所のダリウス・スタリユナス、ヴィタウタス・ペトロニスと共にパネル"Difficult Alliance: Imperial Government and Russian Nationalism on the Western Provinces of the Russian Empire, 1905-1915"を組んで研究報告を行った。このパネルでは、1905年革命の中で行われた政策転換、それによって一時的に緩和された民族政策、さらに、それに対する反動として引き起こされたロシア帝国の統制的な政策などの大きな流れを念頭に置きながら、報告者が個別の研究成果を発表した。ドルビーロフやワースからは、今後の研究の発展につながる重要な意見を受けた。

このアメリカでの国際会議では、本研究課題の研究代表者が代表して研究報告し、さらにリトアニア側と研究打ち合わせを行った。

続いて、この研究打ち合わせを受けて、2018年2月10・11日に東京大学本郷キャンパスにて、リトアニア歴史学研究所との共同企画で、国際シンポジウム"Protecting the Empire: Imperial Government and Russian Nationalist Alliance in the Western Borderlands during the Late Imperial Period"を開催した。このシンポジウムでは、従来あまり明らかにされてこなかった20世紀初頭の諸民族のナショナルな意識の高揚とそれへの帝国政府の対応をテーマとした。全般的な社会運動の進展のなかで、ロシア帝国政府は当初、諸民族をも含む社会的な諸力に対して譲歩的な対応を取るが、次第に帝国統治の強化に向かい、さらにロシア社会でロシア・ナショナリズムが進展したことなど、帝国統治・社会運動・民族意識の諸問題を多角的に分析することとなった。

このシンポジウムには、リトアニアから、リーダーのダリウス・スタリユナス他、オルガ・マスチャニツァらの若手の研究者3名が出席し、アメリカからは再度ポール・ワースに参加を依頼し、さらにイスラエル、フランス、ウクライナから最先端の研究者を招聘し、日本からもロシア帝国研究の最先端の研究者を討論者に招いて、総勢6か国21名で二日にわたって集中的な討論を行った。本研究課題の研究分担者である福嶋千穂、梶さやかも研究報告を行った。

シンポジウムの議論の結果として、20世紀の初頭に民族政策に大きな転換があったこと、それは社会からの要求への対応としてのみならず政府部内の政策的反省の結果として行われたこと、さらに、その政策転換の結果として、民族意識の高揚がさらに進んだこ

となどが明らかにされつつある。しかし、従来盛んに研究されてきた労働運動や革命などどう関係するのか、近代的な社会的な変容とどうリンクするのか、多様な地域での政策の違いや諸民族ごとの対応の違いなどは見られるか、地方の官吏と中央の官僚の間に民族問題への対応の差異は見られるか、など、様々な問題群が提起された。これらの議論により、今後、実証研究の深化が必要であると同時に、議論の枠組みの洗練も不可欠であるが明確となったと言える。

2018年2月のシンポジウムは、当研究課題の総括のシンポであるとともに、結果として、次の研究課題である「ロシア帝国末期におけるナショナリズムと帝国統治構造の変容：西部境界地域を事例に」へのキックオフとしての意味も持った。このシンポジウムで、20世紀初頭の帝国統治と諸民族/ロシア・ナショナリズムの問題を解明する意義が明らかとなった。さらに、今後の共同研究全体の方向性とともに、個々の研究がなすべきことも明確となった。今後は、次の研究課題を遂行する中で、本研究テーマが明らかにした事実を踏まえつつ、さらに本研究が明らかにできなかった問題を追及していくことになるであろう。

本年度の研究成果の一部は、「農民を臣民に鑄直す-帝政期ロシアの農村教師養成のポリティクス-」『歴史学研究』、福嶋千穂「「ルシ」再考」『東京外国語大学論集』として発表された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

青島陽子「農民を臣民に鑄直す-帝政期ロシアの農村教師養成のポリティクス」『歴史学研究』、査読有、962、2017、37-53.

福嶋千穂「「ルシ」再考」『東京外国語大学論集』、査読無、94、2017、189-207.

青島陽子「国民教師養成の社会史-ヴォロネシ教師セミナーの事例から-」『国際文学研究』、査読無、47、2016、1-24.

〔学会発表〕(計15件)

Yoko Aoshima, "Change of the Educational Policy and Its Effects in the Russian Empire at the beginning of twentieth century: in the case of Finnish Schools" Visiting lectures in Aleksanteri Institute of Helsinki University, Helsinki, Finland (21 March 2018).

Yoko Aoshima, "Change of the Educational Policy on the Western Provinces Toward "Liberal" or a Compromise?" The International Symposium in Tokyo ("Protecting the

Empire: Imperial Government and Russian Nationalist Alliance in the Western Borderlands during the Late Imperial Period”, Tokyo University, Tokyo, Japan, 11 February 2018).

Chiho Fukushima, “Consideration to the Influence of Religious Tolerance (Toleration) of 1905 on Former Uniates” (Protecting the Empire: Imperial Government and Russian Nationalist Alliance in the Western Borderlands during the Late Imperial Period, Tokyo University, Tokyo, Japan, 10 February 2018).

Sayaka Kaji, “The Memories of 1863-64 Uprising and its Suppression at the Turn of the 19/20th Century” (Protecting the Empire: Imperial Government and Russian Nationalist Alliance in the Western Borderlands during the Late Imperial Period, Tokyo University, Tokyo, Japan, 10 February 2018).

Yoko Aoshima, “Change of Attitudes or Temporary Compromise? Imperial Educational Policies and the Peoples of the Western Borderlands around 1905” (“Difficult Alliance: Imperial Government and Russian Nationalism on the Western Provinces of the Russian Empire, 1905-1915”) ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies), Chicago, USA, 12 November 2017).

Sayaka Kaji, “The Students and Professors of Vilnius University and the Regions of Vilnius Educational District” (Międzynarodowa Konferencja w 200. Rocznicę Powstania Towarzystwa Filomatów „Będziemy przykładem innym, sobie samym chluba”, Uniwersytet Warmińsko-Mazurski (Olsztyn), 16 Oct., 2017).

Chiho Fukushima, Sayaka Kaji, “The Image of the Polish-Lithuanian Commonwealth in History Education at Higher Education Institutions in Japan” (The III Congress of International Researchers of Polish History, Jagiellonian University, Cracow, Poland, 14 October 2017).

Sayaka Kaji, „Pojęcie narodu i pamięć dawnej Rzeczypospolitej w manifestach politycznych z pierwszej połowy XIX wieku” (III Kongres Zagranicznych Badaczy Dziejów Polski, Uniwersytet Jagielloński (Kraków), 12 Oct., 2017).

福嶋千穂「17世紀前半リトアニアの殉教聖人」(パーリツィン研究会、電気通信大学、2017年4月9日)

Chiho Fukushima, “Unia kościelna w

Rzeczypospolitej Obojga Narodów i jej ślady w dzisiejszej Polsce”(Spotkania polonistyk trzech krajów – Chiny, Korea, Japonia, 広東外語外貿大学(広州、中国) 2016年11月3日~2016年11月6日(報告日は11月4日)

Yoko Aoshima, “The Orthodox Faith emerging as an Imperial ideology: in the encounter with the Polish culture in the north-western region of the Russian Empire in the 1860-70s,” The Summer International Symposium in Vilnius (“Entangled interactions between religions and national identities in the space of the former Polish-Lithuanian Commonwealth”), Lithuanian Institute of History, Vilnius, Lithuania, 22 August, 2016).

Chiho Fukushima, “Uniate Martyr Josaphat and His Role as a Confessionalizing/ Nationalizing Element” (Summer International Symposium 2016 in Vilnius “Entangled Interactions between Religions and National Identities in the Space of the Former Polish-Lithuanian Commonwealth, Lithuanian Institute History, Vilnius, Lithuania, 22 August 2016).

福嶋千穂「17世紀ポーランド・リトアニアにおける殉教事件」東欧史研究会 2016年度第2回例会、東京外国語大学本郷サテライト、2016年7月16日

Chiho Fukushima, “Rus' between Poland and Russia: Concerning problematics in the Terminology in Japan” (Polish-Japanese Research Seminar “Europe seen from abroad” International Cultural Center, Cracow, Poland, 5 February 2016).

Yoko Aoshima, “Experiment on Enlightening Peasants in the Empire: Teachers’ Schools in the North-Western Provinces and the Internal Provinces in the Russian Empire (ICCEES(International Council for Central and East European Studies)IV World Congress, Makuhari, Chiba, 7 August 2015).

〔図書〕(計8件)

橋本伸也編著『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題—ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤』ミネルヴァ書房、2017年(梶さやか「リトアニア—ジェノサイド・センターと国際委員会」、41-54.)

服部倫卓、越野剛(編)『ベラルーシを知るための60章』明石書店、2017年9月(福嶋千穂、「スラヴとバルトの混交域—古ルーシの諸公国とリトアニア大公国」 「両国民の共和国」の時代—ポーランド・リトアニア国家のもとで」19-24、28-33、梶さやか「帝政

ロシア時代のペラルーシーポーランドとロシアの狭間で」.)

梶さやか『ポーランド国歌と近代史 ドンブロフスキのマズレク』群像社、2016年

下斗米伸夫編著『ロシア史を知るための50章』、明石書店、2016年(青島陽子「大改革」の時代—西欧化と帝国の拡張」、88-93.)
南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵編著『新しく学ぶ西洋の歴史』ミネルヴァ書房、2016年2月(青島陽子「ロシアの「大改革」と東西拡張」、147-148.)

福嶋千穂『プレスト教会合同』(ポーランド史叢書1)群像社、2015年12月、132頁。

池田嘉郎・草野佳矢子編著『国制史は躍動する』刀水書房、2015年(青島陽子「ロシア帝国の「宗派工学」にみる帝国統治のパラダイム」121-151.)

Olga Mastianica, Virgilijus Pugačiauskas, Vilma Žaltauskaitė (eds.), Kintančios Lietuvos visuomenė: struktūros, veikėjai, idėjos (Lithuanian Institute of History, 2015) (Savaka Kaji, "Vilnius University and the Beginning of the Historical Research on Lithuania in the Early 19th Century", 138-149.)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

青島 陽子 (AOSHIMA, Yoko)
神戸大学・大学院国際文化科学研究科・准教授
研究者番号: 20451388

(2)研究分担者

福嶋千穂 (FUKUSHIMA Chiho)

東京外国語大学・大学院総合国際学
研究員・講師

研究者番号: 50735850

(3)研究分担者

梶さやか (KAJI Sayaka)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号: 70555408